

本学医療保育科病児保育コース学生の学びに関する研究Ⅱ — 小児病棟実習を通じた「チーム医療」「医療保育」の理解の変容 —

入江 慶太, 神垣 彬子, 宮津 澄江, 笹川 拓也

A Study of Acquisition of Knowledge in Nursing Childcare Students (Ⅱ) — Changes of the Understanding of “Team Medical Care” and “Medical Childcare” by the Childcare Training in the Ward

Keita IRIE, Akiko KAMIGAKI, Sumie MIYADU and Takuya SASAGAWA

キーワード：小児病棟実習, チーム医療, 医療保育

概 要

本研究は、小児病棟実習前後の「チーム医療」と「医療保育」について、理解の変容と実習効果を明らかにすることを目的とした。

分析の結果、「チーム医療」についての理解の変容として、小児病棟実習を通して他職種の連携をより意識するようになったこと、チーム医療をネガティブに捉えないようになったことが挙げられた。「医療保育」については、医療保育の内容を全体的・概念的に捉える視点からより具体的に捉えようとする視点に変化したこと、入院児にとって絶対的味方であるという保育士像を強く実感するようになったこと、医療の中の保育を入院児にとって必要不可欠なものとして捉えるようになったことが理解の変容として明らかとなった。これらのことから、医療の中における保育の現場で実習を行うことにより、「チーム医療」「医療保育」に関してより詳細で具体的なイメージを形成することが出来るという実習効果が確認された。

緒 言

1994年にわが国で「児童の権利に関する条約」が発効されて以降、改めて子どもを権利の主体として捉え、子どもの最善の利益を保障することを前提として様々な取り組みがなされている。子どもは乳幼児期の遊びを通して、自主的に自由に自己を表現する力と感性を養い、様々なものへ挑戦する意欲を持つようになる。また、遊びを通して生活習慣やより良い仲間関係を築くための態度を身につけていく。そして児童期以降、それらをより伸ばしていくとともに学力や理論的に考える力を獲得していく。これは病気を持つ子どもについても例外ではなく、病気を持つという理由で日々の成長や発達を停滞させること、逆行させることは子どもの発達権を侵害することであると言えよう。したが

って、病気を持つ子どもの成長発達の連続性を保障することは今や小児医療の中で大きな関心事となってきた。

こうしたことを背景に、近年小児医療の中における保育への関心が非常に高まっている。保育とは養護と教育が一体化¹⁾した形で子どもに提供されるものであり、遊びや成長発達の理解と支援、生活の支援、ストレスや精神的支援を含む²⁾ものである。医療施設の中で保育を行う保育士の重要性については、看護師の立場からの調査³⁾や保育士の立場からの調査⁴⁾、短期入院児にとっての保育士の必要性における研究⁵⁾など数多くあり、これまでの調査や先行研究から医療施設の中での保育士の必要性が明確にされている。また、2002年度より医療保険制度の診療報酬に療養環境整備加算の1つとして病棟保育士加算が導入されたことを追い風に、徐々に医療施設の中に従事する保育士が増えていくことが予想される。

一方で、医療施設の中における保育士の配置人数、雇用形態、役割、他職種との連携など、いまだ多くの

(平成21年10月16日受理)

川崎医療短期大学 医療保育科

Department of Nursing Childcare, Kawasaki College of Allied Health Professions

課題が残されていることも事実である。中でも病気を持った子どもを中心にして、医師や看護師、薬剤師、理学療法士、ソーシャルワーカーなどの様々な専門職が関わっていくチーム医療が確立している現在、その効果をより高めていくためにそれぞれの専門職がそれぞれの特徴を理解し連携していくことが求められている。したがって、保育士をそのチーム医療の一員として考えた場合、保育士はまず他職種を理解していかなければならない。それは病気を持つ子どもの治療面、生活面、学習面、精神面をバックアップしているチーム医療を理解することに他ならない。

また、チーム医療を高い専門性を有した職種の集団と捉えた場合、当然保育士の専門性も問われてくるであろう。この場合の医療施設における保育士の専門性は「医療保育」という言葉で言い換えることができる。「医療保育」とは、帆足⁶⁾によれば、医療と密接にかかわるフィールドにおける保育を総称したものであり、疾病や障がいなど医療を要する子どもとその家族を対象として子どもを医療の主体として捉えつつ、専門的な保育を通じて本人と家族のQOLの向上を目指すことを目的としたものである。つまり、病気を持つ子どもとその家族に対して保育的視点から関わりを持つこと、具体的には対象に生活支援と発達段階に合わせた遊びの提供、精神的サポートを行っていくことが保育士の専門性として挙げられるのである。

上記のような小児医療の課題を踏まえ、医療施設の中における保育士を養成することに主眼を置いた場合、「チーム医療」や「医療保育」の理解が非常に重要になると考えられる。それと同時に、この2つのキーワードについての理解は医療施設における実習(以下、「小児病棟実習」と略す)を通して変容することが予想される。しかし、これまでに本学医療保育科3年生の病児保育コースの学生(以下、「本科学生」と略す)の小児病棟実習を通じた「チーム医療」と「医療保育」の理解の変容についての調査はない。そこで本研究は、小児病棟実習前後の「チーム医療」と「医療保育」について、理解の変容と実習効果を明らかにすることを目的とする。

研究方法

1) 調査対象者と調査期日

調査対象者は本学医療保育科3年生の病児保育コース選択者39名(男性2名,女性37名;平均年齢(8月)20.54歳;(10月)20.65歳)であった。

調査期日について、小児病棟実習前の2008年8月と実習後の同年10月に授業内でアンケートを実施した。アンケートの内容は「チーム医療」「医療保育」のそれぞれのキーワードについて、自由記述の形式で意見を求める内容であった。アンケートの回収率は実習前・実習後ともに100%であり、有効回答率は実習前が94.9%、実習後が97.4%であった。アンケート実施に関しては、目的、集計、活用方法および集計後の管理について調査対象者に十分説明し、調査に合意した上で行った。

2) 分析方法

本研究は学生が獲得している知識の実態を調査することを目的としているため、整理されていない様々な情報の中からボトムアップ的に新しい概念やカテゴリーを形成していく分析方法を採用し、各項目をカテゴリー化していった。まず、「チーム医療」「医療保育」それぞれのキーワードについての自由記述データを一文ずつに切り取りカード化した。次にそれぞれのキーワードごとにカードをカテゴリー化し、1次カテゴリーを生成した。その1次カテゴリーをさらに同じ意味を示すと考えられるグループでまとめ、2次カテゴリーを生成し表題を付けた。以上の作業を筆者と2人の調査協力者の計3名で行った。なお、評定が一致しない項目は評定者間の協議の上分類を行った。

さらに、「チーム医療」「医療保育」の2つのキーワードについて、小児病棟実習前後の理解の変容を客観的に判断する材料とするために量的な把握を行い、全体の中で各2次カテゴリーが占める割合(表1, 2)、2次カテゴリーごとに各下位項目が占める割合(表3~6)を算出した。

結 果

まず最初に、「チーム医療」「医療保育」それぞれの2次カテゴリーのカード枚数の高低の有意性を明らかにするためにカイ二乗検定を行った。その結果、小児病棟実習前、実習後の順に、「チーム医療」では $\chi^2=134.61(p<.01)$, $\chi^2=130.68(p<.01)$, 「医療保育」では $\chi^2=22.72(p<.01)$, $\chi^2=34.13(p<.01)$ であり、それぞれの2次カテゴリーでカード枚数に高低差があることが確認された。

カテゴリー化の結果、「チーム医療」の2次カテゴリーはチーム医療が成立する条件やその理想像を示す「チーム医療のあるべき姿」、チーム医療を結成している理由に関する「チーム医療の目的」、チーム医療を肯

表1 「チーム医療」についての小児病棟実習前後の2次カテゴリーの割合

【小児病棟実習前】						
	チーム医療のあるべき姿	チーム医療の目的	チーム医療に抱く ポジティブな側面	チーム医療に抱く ネガティブな側面	その他	総合計
カード枚数	60	12	2	13	1	88
全体に占める比率(%)	68.2%	13.6%	2.3%	14.8%	1.1%	100.0%
【小児病棟実習後】						
	チーム医療のあるべき姿	チーム医療の目的	チーム医療に抱く ポジティブな側面	チーム医療に抱く ネガティブな側面	その他	総合計
カード枚数	55	16	4	0	4	79
全体に占める比率(%)	69.6%	20.3%	5.1%	0.0%	5.1%	100.0%

表2 「医療保育」についての小児病棟実習前後の2次カテゴリーの割合

【小児病棟実習前】						
	医療保育像	医療機関で働く保育士像	医療中における保育の業務	医療中の保育についての認識	その他	総合計
カード枚数	20	22	12	9	1	64
全体に占める比率(%)	31.3%	34.4%	18.8%	14.1%	1.6%	100.0%
【小児病棟実習後】						
	医療保育像	医療機関で働く保育士像	医療中における保育の業務	医療中の保育についての認識	その他	総合計
カード枚数	10	32	13	23	3	80
全体に占める比率(%)	12.5%	40.0%	16.3%	28.8%	2.5%	100.0%

定的に捉えていることに関する「チーム医療の抱くポジティブな側面」、チーム医療を否定的に捉えていることに関する「チーム医療に抱くネガティブな側面」、そして4つの2次カテゴリーのどこにも属さない「その他」の5カテゴリーに分類された(表1)。実習前後の比較の結果、「チーム医療のあるべき姿」では68.2%から69.6%に、「チーム医療の目的」では13.6%から20.3%に、「チーム医療に抱くポジティブな側面」では2.3%から5.1%に、「チーム医療に抱くネガティブな側面」では14.8%から0%に、「その他」では1.1%から5.1%

にそれぞれ推移していた。各2次カテゴリーの下位項目(表3, 4)について、「チーム医療のあるべき姿」では実習前が「様々な専門家が連携(41.7%)」「様々な専門家がそれぞれの役割を果たす(15.0%)」「他職種への理解が必要(8.3%)」などであったのに対し、実習後は「様々な職種が連携」が全体の58.2%を占めており、次いで「各々の役割を果たす(5.5%)」などとなっていた。「チーム医療の目的」では、実習前が「患者のためのもの(33.3%)」「高度な医療サービスの提供が可能になる(25.0%)」「最善の治療を考えるためのもの(16.7%)」などであったのに対し、実習後は「一人の患者の治療に多くの職種が関わる(37.5%)」「患者の命を救う(12.5%)」「精神的なサポート(12.5%)」などとなっていた。

表3 「チーム医療」／小児病棟実習前 2次カテゴリーごとの各下位項目が占める割合

チーム医療のあるべき姿		チーム医療の目的		チーム医療に抱く ポジティブな側面		チーム医療に抱く ネガティブな側面		その他	
様々な専門家が連携	25 41.7%	患者のためのもの	4 33.3%	かっこいい	1 50.0%	職種間での上下関係	3 23.1%	分からない	1 100.0%
様々な専門家がそれぞれの役割を果たす	9 15.0%	高度な医療サービスの提供が可能になる	3 25.0%	これからの時代に不可欠なもの	1 50.0%	職種間での対立	3 23.1%		
他職種への理解が必要	5 8.3%	最善の治療を考えるためのもの	2 16.7%			医師中心	2 15.4%		
様々な職種で構成されているもの	3 5.0%	医療に不可欠	1 8.3%			医師・看護師中心	1 7.7%		
情報交換	3 5.0%	高度な医療体制	1 8.3%			怖い	1 7.7%		
医師同士の連携	2 3.3%	より良い医療を提供するためのもの	1 8.3%			職種間での格差	1 7.7%		
患者への共通理解	2 3.3%					人間関係が複雑	1 7.7%		
職種間での助け合い	2 3.3%					よほどの理解が必要	1 7.7%		
協調性が大切	1 1.7%								
職種同士で主張し合う	1 1.7%								
相互に高め合う	1 1.7%								
それぞれの職種の良いところを活かすもの	1 1.7%								
一つの職種が欠けたら成り立たない	1 1.7%								
保育士も参加	1 1.7%								
他の職種の意見を参考にする	1 1.7%								
補完し合うもの	1 1.7%								
譲れないものがある	1 1.7%								
総カード枚数	60 100.0%	総カード枚数	12 100.0%	総カード枚数	2 100.0%	総カード枚数	13 100.0%	総カード枚数	1 100.0%

表4 「チーム医療」／小児病棟実習後 2次カテゴリーごとの各下位項目が占める割合

チーム医療のあるべき姿		チーム医療の目的		チーム医療に抱く ポジティブな側面		チーム医療に抱く ネガティブな側面		その他	
様々な職種が連携	32 58.2%	一人の患者の治療に多くの職種が関わる	6 37.5%	病院で大切	4 100.0%			治療する	2 50.0%
各々の役割を果たす	3 5.5%	患者の命を救う	2 12.5%					努力する	1 25.0%
情報共有	3 5.5%	精神的なサポート	2 12.5%					保育	1 25.0%
情報交換	3 5.5%	医師同士の連携によって難しい手術をする	1 6.3%						
各々の専門性を活かす	2 3.6%	患者を多方面からサポート	1 6.3%						
全体的協働	2 3.6%	最善の医療を提供	1 6.3%						
それぞれの職種の良いところを活かす	2 3.6%	様々な視点から一つの問題にアプローチ	1 6.3%						
各職種がそれぞれに考えを持つ	1 1.8%	社会復帰に向けてのトータルサポート	1 6.3%						
患者への共通理解	1 1.8%	病気の治療よりも結果にこだわる	1 6.3%						
協力が不可欠	1 1.8%								
高度な技術が求められる	1 1.8%								
専門的	1 1.8%								
相互の尊重	1 1.8%								
相互の立場理解	1 1.8%								
チームワーク	1 1.8%								
総カード枚数	55 100.0%	総カード枚数	16 100.0%	総カード枚数	4 100.0%	総カード枚数	0	総カード枚数	4 100.0%

ためのもの(16.7%)」などであり、実習後は「一人の患者の治療に多くの職種が関わる(37.5%)」「患者の命を救う」「精神的なサポート」(ともに12.5%)などであった。「チーム医療の抱くポジティブな側面」では、実習前が「かっこいい」「これからの時代に不可欠なもの」(それぞれ50.0%)であり、実習後は「病院で大切」(100%)であった。「チーム医療に抱くネガティブな側面」では、実習前が「職種間での上下関係」「職種間での対立」(ともに23.1%)「医師中心(15.4%)」などであったのに対し、実習後には該当する記述がなかった。

次に、「医療保育」の2次カテゴリについて、医療保育について全体的な捉え方を示す「医療保育像」、医

療機関に従事している保育士のイメージに関する「医療機関で働く保育士像」、医療機関内の保育に関する具体的仕事内容を示す「医療の中における保育の業務」、医療の中の保育をどのように捉えているかに関する「医療の中の保育についての認識」、4つの2次カテゴリのどこにも属さない「その他」の5カテゴリに分類された(表2)。実習前後の比較の結果、「医療保育像」では31.3%から12.5%に、「医療機関で働く保育士像」では34.4%から40.0%に、「医療の中における保育の業務」では18.8%から16.3%に、「医療の中の保育についての認識」では14.1%から28.8%に、「その他」では1.6%から2.5%にそれぞれ推移していた。各2次カテゴリの下位項目(表5, 6)について、「医

表5 「医療保育」／小児病棟実習前 2次カテゴリごとの各下位項目が占める割合

医療保育像		医療機関で働く保育士像		医療の中における保育の業務		医療の中の保育についての認識		その他						
あらゆる子どもへの保育が可能	6	30.0%	医療の知識を持った保育士	6	27.3%	病気の子どもに必要な保育を提供	5	41.7%	これからの保育に必要	2	22.2%	病気の子ども	1	100.0%
病気に対する恐怖, 不安, ストレスを取り除く	2	10.0%	辛いこと善いことをしない, 小児の絶対的味方	3	13.6%	遊びや会話を通じた病児の心のケアを行う	1	8.3%	必要だが実施しているところが少ない	2	22.2%			
保育の視点で医療に携わる	2	10.0%	医療と保育の両方の知識が必要	2	9.1%	医師・看護師と連携	1	8.3%	まだ進んでいない	2	22.2%			
医療の現場で大切な役割を担う	1	5.0%	子どもの症状の変化にいち早く気づく	2	9.1%	医療現場で保育を提供	1	8.3%	開拓途中の領域	1	11.1%			
医療の知識を持った保育	1	5.0%	保育だけでなく看護の知識も身につけている	2	9.1%	医療の中で保育の専門性が認められた上での連携	1	8.3%	なくても入院は成り立つ	1	11.1%			
医療の中で保育の専門性を発揮する	1	5.0%	医療の現場で働く保育士	1	4.5%	子どもがよりよい状態で治療を受けられるように保育を行う	1	8.3%	入院児に役立つ	1	11.1%			
医療や保育の知識を持って子どもや保育者のサポートをする	1	5.0%	子育ての味方	1	4.5%	入院児に遊びを提供	1	8.3%						
チーム医療の中で保育を必要と考えたときに保育する	1	5.0%	子どもの様子を観察する力が長けている	1	4.5%	病気の子どもに看護を提供	1	8.3%						
どんな子どもにも安心, 遊び, 発達, 成長を与える	1	5.0%	場所を問わず子どもの緊急時に対応できる	1	4.5%									
病気や障がいによって保育に欠ける子どもに医療的な知識を持って関わる	1	5.0%	病院での保育にも関わることが出来る	1	4.5%									
病児や障がい児にも平等に保育を行う	1	5.0%	病気や発達について理解する	1	4.5%									
保育看護	1	5.0%	病棟保育士	1	4.5%									
保育の専門性がより追求される	1	5.0%												
総カード枚数	20	100.0%	総カード枚数	22	100.0%	総カード枚数	12	100.0%	総カード枚数	9	100.0%	総カード枚数	1	100.0%

表6 「医療保育」／小児病棟実習後 2次カテゴリごとの各下位項目が占める割合

医療保育像		医療機関で働く保育士像		医療の中における保育の業務		医療の中の保育についての認識		その他						
あらゆる子どもの保育	2	20.0%	子どもの絶対的味方	6	18.8%	保育士の立場から子どもの精神的サポートを行う	4	30.8%	子どもにとって必要なもの	8	34.8%	緊張な場で役立つ	1	50.0%
医療の知識を持って保育する	2	20.0%	保育と医療の両方の知識が必要	3	9.4%	遊びを提供することで発達を促す	1	7.7%	新しく珍しい	3	13.0%	ピンク	1	50.0%
病気の子どもへの保育	2	20.0%	医療の知識を持つ保育士	2	6.3%	医療職と保育職の連携	1	7.7%	社会的認知度が低い	3	13.0%			
保育看護	2	20.0%	子どもに勇気と元気を与える	2	6.3%	子どものQOLの向上	1	7.7%	まだ受け入れられていない	2	8.7%			
医療と保育の知識の応用	1	10.0%	病院で仕事をしている	2	6.3%	子どもを身体的に保護し, 教育も提供する	1	7.7%	発展途上	1	4.3%			
病気を治療しながら保育を受けることが出来る	1	10.0%	温かい	1	3.1%	入院児に有意義な時間を提供する	1	7.7%	保育士が必要という認識はあるが金銭面で難しい	1	4.3%			
			医療行為は出来ないが, 様々なニーズに対応	1	3.1%	病気の子どもが楽しめる場を作り出す	1	7.7%	保育所・幼稚園以外でも保育が必要とされている	1	4.3%			
			医療についての知識が豊富	1	3.1%	病児とたくさん関わる	1	7.7%	保育に制限が多い	1	4.3%			
			医療の知識が必要	1	3.1%	病児に本来の子どもらしい一面を引き出す	1	7.7%	保育の最先端	1	4.3%			
			医療も保育も学んでいる	1	3.1%	前向きな治療へ導く	1	7.7%	難しい	1	4.3%			
			親から信頼される	1	3.1%									
			看護師とは異なる役割	1	3.1%									
			患児の社会性や内面にも目を向ける	1	3.1%									
			健康な面にアプローチする	1	3.1%									
			子どもに安心を与える	1	3.1%									
			子どもや家族に寄り添う	1	3.1%									
			ともに楽しむ	1	3.1%									
			入院児を笑顔にする	1	3.1%									
			母親的存在	1	3.1%									
			病児保育士	1	3.1%									
			病棟保育士	1	3.1%									
			普通の保育士とは違う	1	3.1%									
総カード枚数	10	100.0%	総カード枚数	32	100.0%	総カード枚数	13	100.0%	総カード枚数	23	100.0%	総カード枚数	2	100.0%

療保育像」では実習前が「あらゆる子どもへの保育が可能 (30.0%)」「病気に対する恐怖, 不安, ストレスを取り除く (10.0%)」「保育の視点で医療に携わる (10.0%)」などであったのに対し, 実習後は「あらゆる子どもの保育」「医療の知識を持って保育する」「病気の子どもへの保育」「保育看護」(それぞれ20.0%)などであった。「医療機関で働く保育士像」では, 実習前が「医療の知識を持った保育士 (27.3%)」「痛いこと怖いことをしない, 小児の絶対的味方 (13.6%)」の順であったのが, 実習後には「子どもの絶対的味方 (18.8%)」「保育と医療の両方の知識が必要 (9.4%)」と逆転していた。「医療の中における保育の業務」では, 実習前が「病気の子どもに必要な保育を提供 (41.7%)」などであり, 実習後では「保育士の立場から子どもの精神的サポートを行う (30.8%)」などとなっていた。「医療の中の保育についての認識」では, 実習前が「これからの保育に必要」「必要だが実施しているところが少ない」「まだ進んでいない」がそれぞれ22.2%を占めていたのに対し, 実習後は「子どもにとって必要なもの (34.8%)」「新しく珍しい」「社会的認知度が低い」(ともに13.0%)などとなっていた。

考 察

まず「チーム医療」について, 「チーム医療のあるべき姿」「チーム医療の目的」「チーム医療に抱くポジティブな側面」の2次カテゴリーの全体に占める割合が小児病棟実習後に増加していた。それらの2次カテゴリーの下位項目を見ていくと, 「チーム医療のあるべき姿」では実習前後で第1位項目の「さまざまな専門家(職種)が連携」が実習前の41.7%から実習後の58.2%に増加していた。この要因は小児病棟実習を通して医師や看護師, 保健師, 理学療法士, 保育士などそれぞれの職種が連携している姿を目の当たりにしたからであると考えられる。これは「チーム医療の目的」の実習前の第1位項目である「患者のためのもの」が, 実習後には「一人の患者の治療に多くの職種が関わる」とより具体的に変わっていることから考えられる。また, 「チーム医療に抱くネガティブな側面」についても, 実習前には「職種間の上下関係・対立」など人間関係の行き詰まりや業務上のトラブルを予想してか, 全体の14.8%を占めていたが, 実習後はそうした記述がなくなっていた。これは医療現場の中で入院児を中心に, 他職種が協力している現実を実習の中で知ることが出来たことが大きな要因であったと考えられる。

その一方で, 2次カテゴリーの「チーム医療のあるべき姿」の第2位項目である「様々な専門家がそれぞれの役割を果たす(各々の役割を果たす)」の全体に占める割合が, 実習前の15.0%から実習後5.5%に減少した上, 低調であった。これはそれぞれの専門職が役割を果たして, 子どもの治療や入院生活をフォローしていくことを「チーム医療のあるべき姿」と捉えながら, 10日間という短い実習期間の中で実習生が1つ1つの職種の役割や専門性を理解することが難しかったことが考えられる。また, 2次カテゴリーの「チーム医療に抱くポジティブな側面」についても, 実習前2.3%から実習後5.1%とほとんど増加していない。これはチーム医療をネガティブには捉えないようになったが, ポジティブに捉えるところまで意識を持つことが難しかったと考えることが出来る。

次に, 「医療保育」について, 2次カテゴリーの「医療保育像」の全体に占める割合が実習を通して31.3%から12.5%に減少した。一方で, 「医療機関で働く保育士像」「医療の中の保育についての認識」カテゴリーが実習を通してそれぞれ34.4%から40.0%, 14.1%から28.8%に増加した。これらの結果, 「医療保育」を「医療保育像」という全体的・概念的な理解から実習を通して医療保育を行う保育士やその必要性など, より具体的な視点に変容したと考えることが出来る。具体的には, 2次カテゴリー「医療機関で働く保育士像」を構成する下位項目が実習前の12種類から実習後22種類に細分化しており, 「親から信頼される」「看護師とは異なる役割」「患児の社会性や内面にも目を向ける」など, 医療機関の中の保育士の多様な存在意義を感じ取った結果を反映していると思われる。また, 実習前には第2位項目であった「痛いこと怖いことをしない, 小児の絶対的味方(子どもの絶対的味方)」が実習後には第1位項目を占めており, 病気を持つ子どもに関わる様々な職種において, 子どもに非常に身近な存在となり得る保育士の特色を具体的に意識することが出来た成果であると考えられる。2次カテゴリー「医療の中の保育についての認識」についても, 実習後の第1位項目が「子どもにとって必要なもの」(34.8%)となっており, これは遊びを主体的に行うことで発育発達していく子どもの入院生活に関して, 保育士の重要性を意識した結果だと言えよう。

一方で, 実習後の「医療の中の保育についての認識」カテゴリーの第2位「新しく珍しい」以下, 「社会的認知度が低い」「まだ受け入れられていない」など, 医療

の中の保育におけるこれからの課題を捉える回答も多くあった。また、「保育士が必要という認識はあるが金銭面で難しい」「保育に制限が多い」など、実習前の認識からより具体的に回答する学生もいた。ここからも実習を通して医療の中の保育に実際に触れ、その現実を知ることが出来た成果がうかがえる。

まとめと今後の課題

本研究の結果、「チーム医療」についての理解の変容として、小児病棟実習を通して他職種の連携をより意識するようになったこと、チーム医療をネガティブに捉えないようになったことが挙げられる。また、「医療保育」については、医療保育の内容を全体的・概念的に捉える視点からより具体的に捉えようとする視点に変化したこと、入院児にとって絶対的味方であるという保育士像を強く実感するようになったこと、医療の中の保育を入院児にとって必要不可欠なものとして捉えるようになったことが理解の変容として明らかとなった。これらのことから、医療の中における保育の現場で実習を行うことにより、「チーム医療」と「医療保育」に関するより詳細で具体的なイメージを形成することが出来るという実習効果が確認されたと言えよう。

一方で、研究を通して今後の課題も明らかとなった。1つ目は帆足⁶⁾が定義する「医療保育」を本科学生が実習を通して理解することが難しかった点である。帆足は医療保育を「子どもを医療の主体として、本人と家族のQOLの向上させるもの」と定義しているが、「家族への関わり」についての自由記述は非常に少な

かった。2つ目は実習生が1つ1つの職種の役割や専門性を十分に理解することが困難だった点である。これら2つの問題は、10日間の小児病棟実習の目標をどこに設定するかという問題に関係してくると考えられる。入院児の家族のQOLの向上や他職種の理解についてどの程度を目標とするか、今後の検討課題としたい。2つ目の課題は、小児病棟実習を経てチーム医療についてのネガティブな捉え方はなくなっていたが、それをポジティブなものだとして捉えるところまで至らなかったことである。実習期間の問題もあるが、先述の実習目標をどこに設定するかという課題とともに、今後の実習内容の再考や事前事後指導の在り方についても検討していきたい。

文 献

- 1) 厚生労働省：保育所保育指針：2008.
- 2) 飯村直子：看護師と保育士の協働に関する両者の意識の現状—日本小児看護学会の質問紙調査結果をふまえて—, 小児看護32(8)：1024—1029, 2009.
- 3) 江本リナ：保育関連職種との連携プロジェクト活動報告 [1], 日本小児看護学会第17回学術集会講演集：57, 2007.
- 4) 飯村直子, 江本リナ, 川口千鶴, 中村伸枝, 日沼千尋, 平林優子：小児病棟における保育士と看護師との連携に関する保育士の意識, 医療と保育7(1)：10—17, 2008.
- 5) 原 純子, 大野雅樹, 植山こずえ, 長嶋正實：医療施設における病児のきょうだい支援(第2報)—小児病棟の看護師と保育士を対象とした質問紙調査からの検討—, 医療と保育7(1)：18—29, 2008.
- 6) 帆足英一：医療保育士養成の現状, 小児看護32(8)：1030—1035, 2009.